

あま
尼
の
泣
き
水
みず



登場人物

ナレーター

あま
尼

わかもの
若者

むらびと
村人
1

むらびと
村人
2

むらびと
村人
3

じゆんれい
巡礼



1



2



3



4



5



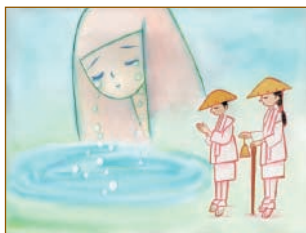
6



7



8



9



10



今から千二百年もの遠い昔のお話です。この頃、日本は日照りや地震などの天災が続いたり、伝染病が流行ったり、人々はとても不安な思いで暮らしていました。

天平十三年、聖武天皇は、人々の平和な生活を願って、国ごとに国分寺と国分尼寺を建てるように命じました。相模の国では、海老名が良い土地であったのでここに建てられることになりました。

長い年月と多くの資材、村人の労力によって、やがて天をつくような七重の塔を始めとした国分寺ができました。

村人 1

村人 2

村人 3

「まるで、奈良の都のようだ」
「ありがたい、病気で苦しむこともなくなるだろう」
「これは、わしらの手でできたものだ」

と人々はあがめていました。国分寺から北に五百メートルほど離れた場所に、国分尼寺が建てられました。そこには、都から来た若い尼さんがいました。慣れない土地での厳しい修行の毎日でした。相模川に水を汲みに行くことが仕事でしたが、上手に水を汲むことが出来ませんでした。



尼
若
者

ある日のこと、若者が困った顔をしているので、
「どうしたのですか。何か心配事でもあるのですか」
とたずねました。若者はなかなか口を開かなかったのですが、やがて決心し、
「このごろは、いくら網をうっても、魚がかからないのだ。このままでは、
ここでは暮らしてはいけない。それで、ほかの土地へ行こうと思って・・・」



尼
若
者

そのころ、国分寺の下を流れる相模川で、魚を取って暮らしていた若い漁師がいました。若者は、尼さんの水汲みを何度か手伝っているうちに、二人は親しくなりました。
「いつもありがとうございます。本当に助かります」
「こんな事何でもないわ、何かあったらいつでも手伝うよ」
尼さんにとって、若者との語らいはとても楽しいひとときでした。二人は、互いに愛し合うようになりました。その当時、尼さんは男の人と話すことが禁じられていましたので、みんなに見つからないようにひっそりと会っていました。



尼
ここまで話すと、若者はだまって立ち去ろうとします。尼さんは、若者にすがるようにしてたずねました。

「まえにはたくさんとれたというのに、どうしたことでしょう。おねがいです。本当のことをいうてくだされ」

若者
「魚が逃げていったのだ。川につきささるような太陽の光におそれて、魚がとれなくなつたのだ。」

それを聞いた尼さんは、不思議に思いました。

尼
「太陽の光、それなら今までも同じはずなのに、どうして……」
そこで若者は、国分寺の金色に輝く伽藍を見つめながら、うらむように言いました。

「あの伽藍に太陽の光があたり、その照り返しですさまじい光がさすのだ。それで魚がみんな逃げてしまう。あの国分寺さえなければ……」

尼さんは立ち上がって、月の光にくつきりとかぶ国分寺を見つめています。それ以上何も言えず、二人はさびしそうに別れていきました。

その後何度か、尼さんは相模川に行きましたが、若者の姿を見ることはありませんでした。若者に会えない寂しさでいっぱいでした。



村人 3
村人 2
村人 1

「なんとおそろしいことだ」
「いったいどうしてこんなことになったのだ」
「あんなに苦しい思いをして建てたのに」
それから何日かたつて、国分寺の火事は、尼さんが、火を放つたのだ、と
いううわさが、村々にひろまっていました。

そのときすでに、若い漁師に思いを寄せていた尼さんはとらえられていま



村人 1
村人 2
村人 3

それから、何日か過ぎた風の強い晩でした。

「火事だー火事だー」 「火事だー火事だー」

「国分寺が燃えているぞー」

人々は、叫びながらとんでいきました。

見ると国分寺が、メラメラとくるったようにもえ、きよだいな火柱となつて
天をこがしながらくずれ落ちていきます。村人は、もう消すことさえできず、
炎を見つめているだけです。

おそろしい一夜が明けて、しずかな朝がおとずれました。国分寺の焼け跡は、
まだくすぶっていました。あの金色に輝いていた伽藍は、一夜のうちに焼け落
ちてしまいました。

「なんとおそろしいことだ」

「いったいどうしてこんなことになったのだ」

「あんなに苦しい思いをして建てたのに」

それから何日かたつて、国分寺の火事は、尼さんが、火を放つたのだ、と

いううわさが、村々にひろまっていました。

そのときすでに、若い漁師に思いを寄せていた尼さんはとらえられていま



村人 1

村人 2

村人 3

した。その罪は重く、丘の上で刑場のつゆと消えたのです。

その後、不思議なことに、その場所から一てき二てきとわき水が流れ出てきました。それはわき出る泉のように、つきることがなかったということですから。これを見た村人は、

「これは、尼さんがつみをわびて流している涙だ」

「恋する若者との別れるつらさに流した涙だよ」

「あんなに優しい尼さんは、火をつけていないよ。嘆き悲しんでいる涙だよ」とも言つて、このわき水を「尼の泣き水」と呼ぶようになりました。

巡礼

その後、国分寺へお参りにくる巡礼たちは、
「朝日さし、夕日かがやく国分寺、いつもたえぬ、尼の泣き水」
と、ご詠歌をうたいながら、鈴をふつて、かわいそうな尼さんの冥福を祈るようになったということです。

補足

1 国分寺参道入り口に「大櫓」おおけやきがあるが、漁師が船をつなぐために打った杭くいが根付き大木になったといわれている。

2 「尼の泣き水」しやうわ昭和四十年ごろまで流れ出ていたが、まわりに家ができたりしたので、いつとなくかれてしまった。現在は国分寺の境内けいだいに「供養くよう碑」ひが移うつされている。